

掌

現

編

代

上

小

作

說

家

集

現代作家掌編小說集 上

現代作家掌編小説集 上

初版発行 昭和四十九年八月八日

編集発行人 白井達男

発行所 株式会社朝日ソノラマ

郵便番号一〇四 東京都中央区銀座四丁目二番六号
電話 東京(五六三)六〇二〇 振替 東京四〇三二

印刷所 凸版印刷株式会社

定価 一二〇〇円

落丁、乱丁本はお取り替え致します。

現代作家掌編小說集 上 目次

セキセイインコ

井上靖 5

空の上

古井由吉 17

草莽の歴史

石川達三 27

少女

吉田知子 37

醜い少年

飯沢匡 47

蜥蜴のしっぽ

中里恒子 59

隠の芸の男

城山三郎 71

育ちざかり

藤原審爾 83

犬吠埼

中村光夫 93

竜宮

大城立裕 105

幸福の手応え

佐多稲子 117

幼女

島尾敏雄 127

示談	風の匂い	不動図	海鷗	出版の人	昼さがり	床屋の話	二十八年	遺稿	永遠の相の下に	犬の年齢	出口入口
吉村昭 265	大岡昇平 253	川口松太郎 241	小川国夫 229	三木卓 219	円地文子 207	小沼丹 195	平岩弓枝 183	丹羽文雄 173	大西赤人 161	安岡章太郎 149	永井龍男 137

赤坂の宿

今日出海 277

二十年目の偽証

阿部牧郎 287

ワラビとツチノコ

田辺聖子 299

社長の体験

戸板康二 311

雛壇のひと

舟橋聖一 323

片隅のいのち

三浦綾子 335

解説 執筆作家のプロファイル 巖谷大四 347

装幀 原田維夫

セ
キ
セ
イ
イ
ン
コ

井
上
靖

私の家の庭は、決して広いとは言えないが、秋から初冬にかけてはいろいろな鳥がやって来る。近所に馬事公苑があつて、そこに集る鳥のうち、多少毛色の変つたのが、往きか帰りかに立ち寄ってくれるのである。あるいは馬事公苑に住みついているのが、時に気晴しにやって来ることもあるらしい。私の家ばかりでなく、近所の家も同じことである。ほんのひと握りの芝生の庭でも、二、三本の木でもありさえすれば、どの家をも、鳥は訪ねてくれる。この鳥の訪問だけが、他にこれといつて特徴のない私たちの住んでいる世田谷中級住宅地域の恵れた点である。

今年の春は櫟の木に設けた巣箱に四十雀しじゅうからがはいり、そこで生れたのが秋まで庭に住みついていた。雉鳩も三番つがいいつももうろしていたところから推すと、私の家の槇の木か、隣家の木斛もくこくの木にでも巢を営んでいたのかも知れない。椋鳥むぐりも時には二、三十羽の大部隊でやって来て、芝生をつつき廻つて、すぐ翔び立って行く。鳩もやって来るが、二番いだけは何となく居着いている恰好で、芝生に坐つたまままで動かないでいることがある。長男の観察によると、午睡をとっているのだそうである。

雀、尾長おなが、椋鳥はどういうものか、群れでやって来て、芝生いっぱい散らばり、いっしょになつて芝生の虫をつついてゐる。娘の観察によると、尾長は意地悪で、時々、雀と椋鳥の群れの方に近付いて行って、相手を追立てていふと言う。ほかの鳥の餌をつついてゐる場所がよく見えるのである。

今年の秋、十月の初めのことであるが、書斎の縁側でお茶を飲んでいる時、私は庭の方へ視線を

投げて、おや！　と思った。二十羽ほどの雀が散らばっている中に、一羽だけ、ひと眼でそれと判る雀でない緑色の鳥が混じっていたからである。セキセイインコであった。セキセイインコに野生のがある筈はないから、どこかの家に飼われていたのが逃げ出したものと思われた。

私は庭に降り立った。すると、いっせいに雀の群れは翔び立ち、少し遅れて、セキセイインコもまた多少不器用な舞い上がり方で舞い上がって、雀たちといっしょに道一つ隔てた前の家の樹木の茂みにはいつてしまった。

この日、もう一度、同じ雀の群れがやって来た。と言うのは、その雀の群れの中に緑色のが一羽混じっていたからである。こんどは、私は庭に降り立たなかった。どう見ても一羽だけ別物がはいっている感じである。色も違えば、形も違う。そのうちに、何に驚いたのか、雀たちはいっせいに翔び立った。すると、セキセイインコもまた翔び立った。ただ雀ほど俊敏には行かない。何となく動作緩慢で、不器用である。しかし、雀の群れを追って行き、隣家の屋根の辺りでいっしょになると、それからいっせいに西の方へ翔んで行った。その時は家内も見えていたので、私は家内に言った。

「雀たちは隣りの屋根のところで、セキセイインコを待っていてやったんだよ。そして緑色のがいっしょになると、では、よし、というわけで、揃って翔んで行ってしまった」

「本当かしら」

家内は言った。

「本当さ。雀でも、自分の群れに身を投じて来たものは棄てないんだ。そういうところは人間よりずっと高級だ。雀もいいが、セキセイインコもいい。多少羽の色は違うが、どうせ短い一生を過すだけの話だ。雀といっしょに生きてやろうと思ったんだ」

私は言った。

その夜、三人の客があった。私は酒を飲みながら、昼間見たセキセイインコの話をした。最近人間の社会では荒ぶれた事件ばかりで、明るいニュースはないが、鳥の社会では、セキセイインコが雀の群れの中にはいって、雀の社会の掟に従って生きているという微笑ましい事件が起っている。セキセイインコもいいし、またセキセイインコを拒否しないで、大きく包容している雀たちもいいではないか。

客たちは、いずれも、ほう、そういうことがありますか、奇妙なことですね、その程度の感心の仕方をした。私は客たちの感動が、自分が期待するほどのものでないことを齒がゆく思った。

「貴方が見た時、たまたまそういう状態だったんでしょね。セキセイインコはセキセイインコ、雀は雀、結局はいっしょになれませんよ。今頃は、お互いに赤の他人になって、別々のところで眠っているに違いない」

私は、そう言った客の一人に対して強い反発を覚えた。よほど貴方とは違うと言おうと思ったが、辛うじて、それに耐えた。

半月ほど経って、私は馬事公苑に昼の散歩に行った時、再びセキセイインコが雀の群れの中に居るのを見た。馬術競技場のスタンドの一隅に居る時であった。と言って、馬術競技を見ていたわけではない。馬術競技が行われている時は、私はスタンドなどには近寄らないが、その日は一頭の馬の姿も見えず、競技場も、スタンドもがらんとしていたので、私はそこへ行って、秋の陽光を浴びて、新聞を読んでいたのである。

——おや、あれ、セキセイインコだわ。

突然声が聞えた。二、三間離れたところで、編みものをしている三十歳ぐらいの女が叫んだのである。なるほど、スタンドの裾に雀の群れが散らばっており、その中に例の緑色が一つだけ紛れ込んでいる。

——なるほど、セキセイインコですな。

もう一つの声が聞えて来た。声の主は、スタンドの上の方から降りて来た。五十歳ぐらいの、ズボンにセーター姿の男である。この方は一、二回見掛けたことのある顔で、馬事公苑の散歩人種の一人であろうと思われた。いつも小型の携帯ラジオを持っている。女と、男と、私は何となく一カ所に集って立っていた。みんな雀の群れの方に視線を投じている。

「ひと月ほど前に、家の庭で、このセキセイインコを見ましたよ。その時も雀といっしょでした。同じ雀の群れだと思いますね」

私が言うと、

「ほう、そういうことがあるんですかな」

男は感慨深かけになおも雀の群れの方に視線を投げており、女は、

「つかまえられませんかしら。なかなかいいセキセイインコですわ」

と、慾の深いことを言った。と、とたんに雀たちは翔び立ち、セキセイインコもまた一羽だけ遅れて翔び立って、雀の群れを追って行った。

「敏感なものですよ、鳥というものは」

私は言った。多少女に腹を立てていた。

その後散歩に出る度に、馬事公苑に於てはもちろんのこと、その往復の道に於ても、私は雀の群れを見ると、その度に足を停めた。しかし、再びセキセイインコの姿を眼に入れることはできなかった。家に居る時も、庭に雀が来たと思うと、すぐ机の前から立ち上がったが、いつも期待を裏切られた。

秋が深まるにつれて、次第に私の心からも、セキセイインコのこととは薄れて行った。時に思い出すと、一体今頃あの緑色の鳥は雀の群れの中でどうしているであろうかと思った。どこかに家出した浮気娘の身の上でも案じている父親の気持に似ていた。

十一月にはいつてからの、ある晴れた日の夕方であった。私は閉苑時刻の四時に近い頃、馬事公苑にはいつて行った。大急ぎで苑内を歩いて、日課の一つになっている散歩を果すだけは果そうと

思った。葉を落した疎林の間に落日近い赤い太陽が架かっている。

疎林を脱けたところで、携帯ラジオを持った男とぶつかった。いつかスタンドで短い言葉を交したことのある男である。

「あれから、もう一度、あのセキセイインコを見ましたよ」

男は言った。

「丁度、この道だったと思うんです。雀の群れは前の時より大きくなってしましてね、そうです、三十羽ぐらいの群れだったでしょうか、その中であの緑色のが、全く雀の中の一羽になりきっていました。驚きましたね。私、思うんですが、あのセキセイインコには自分がセキセイインコだという自覚はありませんね。自分は雀だと思っている」

「ほう」

と言うほかなかった。私は男といっしょに歩き出した。そろそろ表門の閉まる時刻に近付いている。

「でも、やっぱり自分は、他の雀たちとは違うと思っているんじゃないですかね」

「いや、そういうことには気付いていないと思いますね。雀の方は、変なのが一羽紛れ込んでいるとは思っているんですが、まあ、色は違うが、同じ鳥なんだし、——」

「雀の方は、そうかも知れませんが、セキセイインコは——」

「あの緑色のも、自分で、自分は違うという認識に立てば、雀の群れから離れると思うんです。し

かし、それに気付かない。そこが悲劇です」

それから、男は突然笑いを皺の多い顔に浮かべると、

「いや、私事にわたって恐縮ですが、実は私などもセキセイインコでしてね。一生自分は違うということに気付かないで、雀の中にはいつていました。この春、職場を定年で退き、幸い来年の春から新しい職場に入ることになっていますが、これまでの会社における限りでは、どうもセキセイインコでしたね」

「――」

「物を売るということは一切だめな性格なんです、がむしゃらに物を売ることが仕事としている会社で定年まで勤め上げましてね。悲劇でした。しかし、よくしたもので、会社はさして文句も言わず、定年まで飼ってくれました。雀の集りみたいな会社です」

二人が門を出ると、鉄の格子の門はすぐ左右から閉じられた。二人はそこで五分ほど立話して、別れた。

いつかスタンドで編みものをしていた女に会ったのは、十二月にはいつてからである。馬事公苑の横手の門を出たところで、そこに立っていた女とばったりと顔を合せた。

「やあ」

と、会釈すると、相手はすぐには判らなかったらしいが、ちょっと間を置いて、

「ああ、あの時の——」

と言った。あの時は少々小憎らしかったが、今見ると、明るい感じの美人である。

「この近くにお住いですか」

「歩いて二十分ほどのところですよ。いま主人がマラソンをしておりますが、ここで主人を拾うことになっております」

言われてみると、道の向う側に自動車が一台置かれている。

「あれから、セキセイインコをごらんになりましたか」

私は訊いた。これが訊きたかったのである。

「いいえ」

「あの時、あのスタンドに男の方が居たでしょう。あの人に、この間会いましたら、あのあと、馬事公苑の中で一度見たと言っていました」

「まあ、そうですね。それにしても、あのセキセイインコ、今頃どうしているんでしょうね。可愛い利口そうなセキセイインコでした。——辛いでしょうね、雀の中に居ることは。——たいへんな忍耐だと思いますわ」

「自分がセキセイインコだということは知らないんじゃないですか。自分も雀だと思っている。——尤も、これは私の意見ではありませんが」

私が言うと、

「あら、——そうなんですか」

女は驚いたように表情を変えて、

「わたくし、あのセキセイインコのことを主人に話しましたら、主人は、そのセキセイインコは自分だと言うんです」

そして、ちょっと首をすくめるようにして笑った。

「自分はセキセイインコだが、我慢して雀の中にはいつて、雀とつき合ってやっているんだ、こう申しますの」

「――」

「絵描きですよ、主人」

「――」

「主人に言わせると、画壇という雀の群れの中では、セキセイインコは、いっこうにうだつがあらないんですって」

「――」

「でも、来年の春、銀座のK画廊で個展を開きます」

「それは、それは、結構じゃないですか。セキセイインコどころじゃない」

「あら、セキセイインコが参りましたわ。これで失礼いたします」